慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに(身体をキャプチャーする : 表現主義舞踊の系譜)
Sub Title	Preface(Capturing the Body : Expressionist Dance Then and Now)
Author	前田, 富士男(Maeda, Fujio)
Publisher	
Publication year	2003
Jtitle	Booklet Vol.10, (2003.) ,p.5- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000010-04211240

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに　Preface

マルチ・メディアを急速に展開させている現代は、いわば身体を透明化し、身体を不要としつつある時代にほかならない。それでは、情報テクノロジーの拡大は、必然的に身体なきテクノロジーに逢着するのだろうか。われわれはしかし他方で、個人間にせよ社会的集団内にせよ、身体的コミュニケーションが今日なお決定的役割を果たしている事実を認めざるをえない。スポーツ報道の異常な肥大化や、サイバースペースにおけるいわゆる「出会い」系サイトの持つ意味は、おそらくはそう単純ではないだろう。なぜなら、身体の透明性と不透明性、抽象性と具体性とがこれほど短絡的に重なりあう現象は、今日の多様な出来事にてらしても、他に例をみないほどラディカルだからだ。「身体」はこのように、社会学的視点からも思想的根拠の点からも、現代社会でもっとも緊要な問題性を帯びた概念として位置づけざるをえない。

身体的コミュニケーションの意味はもちろん、ひろく人間の経済活動・政治的行動から「あそび」にいたるまで、全活動領域で主題化しうる。だが、「芸術における身体」の視点は、この主題化にとってきわめて重要な役割を果たすにちがいない。なぜなら、芸術はカントの指摘するとおり、社会的利害関心を拒否する「没関心性」を特性とする表現行為であり、他方で身体はつねに、あらゆる意味で「関心」の圏内を生きるからだ。

「芸術における身体」とはすなわち、近代以降の時代状況、つまりカント以降の時代では、アンビヴァレントな様相を含意せざるをえないのである。「芸術における身体」は、言うまでもなく演劇と舞踊に発現する。そのなかでも、「芸術における身体」を近代以降の状況下で捉えようとすれば、まず表現主義舞踊をこの問題を追究するための舞台の最前景におかざるをえない。なぜなら、そこでは、「芸術」と「身体」とを接合するために「自由な舞踊」に照明があてられたからである。

表現主義舞踊とは、1905年にベルリンで学校を開設したアメリカ生まれの女性舞踊家イサドラ・ダンカン（1878-1927）に触発されたルドルフ・フォン・ラバン、マリー・ヴィグマン、クルト・ヨースらの20世紀前半の運動を意味し、その後、現代のピナ・バウシュに継承されてモダン・ダンスの流れの中核を形成する運動を指す。「自由な舞踊」は、ラバン、ヴィグマン、ヨースによって多様に模索、実験され、そして、確立された。

2001年7月12日・13日の2日間、慶應義塾大学三田構内にて「身体をキャプチャーする——表現主義舞踊の時代と今」と題するシンポジウムが開催された。この領域の研究者として世界的に知られるヴァレリー・プレストン＝ダンロップ、ヘートヴィヒ・ミュラー、パトリツィア・シュテッケマンの三氏は、このシンポジウムのために来日され、松澤慶信氏とともに講演・討議に参加された。

本誌は、この講演・討議にもとづく論考を四氏にご寄稿いただき、さらに討議の司会にあたった前田富士男が小論を、そして参考文献一覧を加えて特集「身体をキャプチャーする」とした。四氏のご寄稿ご協力に感謝するとともに、シンポジウムの開催、および三氏の来日についてご支援いただいた東京ドイツ文化センターとブリティッシュ・カウンシルに感謝を申しあげたい。とくに、東京ドイツ文化センター・文化部長ペトラ・マトゥシェ氏、ブリティッシュ・カウンシル・アーツ担当官桜井武氏の多面的なご尽力には記して謝意を表する次第である。また、松澤慶信氏にも準備過程でお世話になった。御礼を申しあげる。本誌の内容が芸術における身体問題の追究に資することになれば、幸いである。

前田　富士男
慶應義塾大学アート・センター副所長